

火星



平成19年11月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

鬼の子の潮さぶる顔出しゐたり

やや寒き山の畑に蝶ふたつ

鹿が口つけたる水の暮早し

谷底にししうど枯るる十三夜

神学部裏に花野の終りたり

雨脚がみづうみをくる草の花

角伐会肩のシヨールのずれやすく

曼珠沙華の鬩の中なる腓なり

船端が岩にごつんと豊の秋

座布団をつめて見えけり枯蓮

太白星

柳生千枝子

凜然と山桔梗佇つ露含み
秋の雲とけて流るる天の青
秋雲の奔放羨し坂下る
鰯焼く独りの厨けぶらせて
鰯食む独り暮しも十年なる
月出づる独りに馴れし夜の紺
月冷ゆる夫も仰ぐかあの世にて

杉浦典子

汗の子のなにかたくらみぬて静か
拗ねし子が汗の頭を押してくる

草市のもの水平に提げ帰る
硝子戸に翅の貼りつく残暑かな
遠山の灯を吹き減らす葛嵐
初鴨に劇場の灯の及びたる
虫籠にとどかぬ灯り点しけり

浜口高子

浮御堂の柱四本や日の盛
湖風に靡ける草の市のもの
和草の風灼けてゐし后稜
盆過ぎの机の下の紙風船
洗堰の真中くぼめるきりぎりす
半乾きの俎板に月大きかり
あをあをと鵜籠を通ふ宇治の風

火星作品

山尾玉藻選

銀漢や硝子の箱のテイールム
八幡丸山照子
大津絵の扇に残暑払ひけり
蜘蛛の囀に三日蜘蛛ぬ秋の風
流れ橋よりつづきけり天の川
ものふに今秋草の花ざかり
目高の子放つすなはち遡る
明石戸栗末廣
あすなるの実の浮いてゐる泉殿
凭れゐる樹にひぐらしの鳴きはじむ
山女焼く山女の川に星映り
盆の花抱へきし胸濡れゐたり
分け入りて笹のにほひや夏の果
宝塚蘭定かず子
風になびくものを足しけり盆の花
灯点さずゐる蝸の二階かな

木道に十字路のあり秋燕
鬼の子のあしたの雨に瘦せてゐし
夏葱の村より昏るる湖北かな
秋立つや波の素通る魼の丈
濯ぎもの湖に浸けあり稲の花
魂棚の影あるもの匂ひけり
みどりごに提灯触るる地藏盆
峰雲や牛なぐさむる母の声
雲の峰ペンションに葱育ちをり
流燈の胸もと暮れてゐたりけり
前髪をふくらます風夏了る
みぎひだり子の髪編める良夜かな
朝ぐもり庫裡の柱に刀疵

大和郡山

伊勢きみこ

大和郡山

城

孝子

神戸

深澤

鱻

選のあとに

山尾 玉藻

先日ある句会で、〈耳大きいと見上ぐる青酸橘〉と言う句が出され、それを選んだ方が司会者から賛同の理由を求められた。しかし思いが上手く言葉にならず、その方は少々困られた様子だった。そこで私は、「理屈ではなく耳大きい人は偶然から生まれた必然なのです」とつい口を挟んでしまったのだが、これは少々抽象的な表現であつたようだ。句会の後でその方は、「好きな句の良さを的確に説明できない時はどうすれば良いのでしょうか」と神妙な顔付きで尋ねられた。

この戸惑いは誰もが経験することであろう。句には大いなこころ惹かれるがその良さを伝えるのは難しい、しかし意外な感じは全くおこらない、と言うケースは多々ある。しかしそのような句は、敢えて無理な説明（本来は鑑賞と言うべきであろう）を要さないだろう。その句に自身の直感、直覚という触覚が思いがけず反応した結果であり、そこに理由や理屈は存在しないからである。私が言った偶然から生まれた必然とは、「一句に描かれた偶然性を自ずから然りと肯定し、共鳴する」と言う意味合いのことであつた。

しかしながら、ぶれない直感、直覚という瞬発力は、努力なくして決して具わるものではないだろう。直感、直覚とは、常に多作多捨を心がけ、出来るだけ多くの優れた作品に

触れ、ひいては俳句以外の世界にも好奇心旺盛でいて、それらの経験に裏付けされた体に培われた感覚だからである。

俳句は互いの共通体験を拠り所にする、他力本願のちつぽけな詩である。作り手と読み手の共同作業により成立する詩である。だからこそ、お互いにこの直感、直覚を磨き合えば、「火星」と言う共同作業の場で無限大のエネルギーを生みだせる筈なのである。

流れ橋よりつづきけり天の川

丸山 照子

豊かな感受性と冷静な写生力が融合し、スケールの大きな一句を招来した。虚構にはない、どっしりとした実体感がある。一方、〈蜘蛛の囿に三日蜘蛛ぬぬ秋の風〉では、感情を静かに抑え季語をフル稼働させている。

目高の子放つすなはち遡る

戸栗 末廣

単純至極に「目高の子」を活写し、「目高」の本意をついている。た易く言い放つているようだが、じつくりと対象に向き合わなければ、このような小さな発見さえ得られた。〈盆の花抱へきし胸濡れぬたり〉の平明さも良く、単純ゆえに複合する世界を蔵している。

分け入りて笹のにはひや夏の果

蘭定かず子

直感、直覚と言える「夏の果」への展開が巧みであり、大いに納得させる秀句である。何故か北国の晩夏を思った。〈風になびくものを足しけり盆の花〉も印象深く、作家として良いところの色が感じられる。（以下略）

恒星圈

山本耀子

鮭の子を放せし浅瀬わが素足
石叩きに付きゆく汀花火屑
風筋の落蟬ことと動きけり
修道院の木靴・草帯や稲の秋
霧襖開き山頂に木のクルス

丸山照子

吉田島江

あはうみの松の傾ぎを競渡かな
湖へかはらけ投げし秋の昼
船笛の竹生島を発ちぬ盆の雨
潮の香のかよふ七夕飾りかな
くれなゐの朝顔ばかり蟹満寺

日は風に風は日に生れ文字摺草
花車前草見ある頰杖長かりし
浮雲も風も素通る種茄子
暫くは花火の匂ふ山の霧
鉄砲百合の口こちら向く忌日かな

山田美恵子

吉田康子

湯上りの匂ひたつ子と魂送り
豊年の綿菓子跳る綿菓子機
月光に射貫かれたるよ喉の腫
山腹の明るきところ踊唄
三役の席のからつぽ祭笛

梅雨明や佐保の堤の羽の音
茅葺の資料館なり桐一葉
井戸端の桶のぜんまい盆仕度
床の間に挿すたつぷりのねこじやし
仕事場に松虫草を育てをり

獅子座

山尾玉藻推薦

西畑敦子

初鴨の五羽の水面の揺れであり
初鴨の胸にとどきし舟の波
抜け道を盆僧に聞くドライバー
通夜席にひとりなりけり星月夜

垣岡暎子

玻璃ごしの空へ試せりサンガラス
軒先に盆のもの吊り何でも屋
えごの花勝手な母に会ひにゆく
大滝に背すぢ伸ばしてゐたりけり

天谷翔子

初風のガードレールのへこみかな
竹生島七夕笹に浮みゐる
片頬の風色もなく音もなく
隣室にページ繰る音涼新た

奥田順子

奥山は鹿の子に斑つきたがり
ふる里は夕菅揺れてゐる頃か
中天に月残りけり大花火
こがし繰る分厚き母の掌でありし

蘭定かず子

駒鳥や岩場を登る手の置き処
薄月の色にオクラの咲きにけり
虫の夜や陶土に粗布のかぶせある
秋灯や鳥の渡りの話など

緒方佳子

天の川夜間工事の鶴嘴に
穴まどひ話のつなぎ見つけたり
トースター二つほど茄子焼きにけり
声変りの君土用波みて走る

渡邊美保

朝曇湖岸に網をたぐる人
柿食うべ相続放棄の話など
突堤の灯台赤し葉月潮
百日紅父さんと行く貝類館